

～輝きの子育て～

子どもを悪くしたのは誰？

～「思いやり」を受けて「思いやり」が育つ～

片野英子

子どもに対して「思いやり」のあるお母さん、お父さんは子どもを叱ることが少ないものです。

それは子どもの立場に立って考え、子どもの気持ちを汲むことができるからで、その結果、子どもを叱る気持ちになれないのです。もし、子どもの行動に気になるような面、「悪い」と思えるような面が現れた時には、親達の育て方に何らかの誤りがある、子どもを悪くしてしまったのではなかったか、と反省することです。そのような反省の中から育て方の誤りに気づいた時には、それを改める努力をするものです。一生懸命に子育てに努力しているお母さん、お父さんであっても、その育て方が完全というわけにはいきません。むしろ不完全であることが少なくないものです。繰り返し育て方について反省をしながら、それに修正を加えることが必要になります。その際には夫婦間の話し合いが、何よりも大切ですし、話し合いの際に相手を非難しないことが前提条件です。自分本位のお母さん、お父さんは子どものしつけに性急です。しかも身勝手に頭に描いた（よい子）の鋳型に子どもをはめ込もうとし、それに応じない子どもを叱ったりしています。よくお前のためを思って叱っているのだ。などと言いますが、それはかっこうの良い姿を望んだりして、お母さんお父さん自身が他人からほめられることを、ひそかに願っていることが少なくないのです。

子どもの情緒の安定が何より大切！！

子どもの情緒の安定は、日常生活において重要な意味をもっており、情緒が不安定な子どもは「自発性」の発達が阻害されるばかりでなく、様々な扱いにくい行動や身体症状を現すことがおおくなります。

子どもの情緒の安定は、親と子どもとの一対一の関係の中で親から「思いやり」を受けることによって実現されます。「思いやり」とは、子どもの立場に立って考え、子どもの気持ちをくんであげることです。

家族関係がかもし出す雰囲気は子どもの人格形成に大きな影響を及ぼします。自己統制の能力が発達していくには子どもを十分かわいがることであり、それによって「思いやり」の心がだんだん芽生え自分本位の気持ちが少しずつ減り、わがママが少なくなっていくと思われれます。又、人に対する子どもの愛情の発達にも親から「思いやり」を受けることにより、子どもの愛情も豊かになります、親から大切に思われていることによって他人への信頼感が強くなります。

参考資料 「心の基地はお母さん」 平井 信義著